

春燈

5月号
May 2012



主宰の句

安立公彦

茂吉忌やわが青春の『白き山』

ふるさとに老いし兄病む雪間草

春遅々と喜寿の面をさらしゆく

幼児に飾る雛や愛しけやし

汝が生れし三月天地ひかり充ち



久保田万太郎の句

墓なくや曾津若松本覺寺

「如空山本覺寺所蔵茶掛」昭和九年

昭和四年末廣酒造社長新城猪之吉（杏所）を会長に會津吟牡が発足、事務局を寺町の本覺寺に置き住職の江川月泉が事務万端を引き受けたが、九年『櫻の芽』を創刊するに選者を万太郎に依頼、以後月々来若しこの句を示した。

然し二十年敗戦近く月泉が入寂、後任住職の蒲生雪郎が編輯等を引き継ぐとへ先住のうはさにけふる蚊やりかなの一句を残して、選を富安風生に交代した。この二句は寺の宝と遺り、櫻桃子も来若確認している。

滝沢 幸助

久保田万太郎の句

仰山に猫みやはるわ春灯

『流寓抄』昭和三十三年

「祇園 杏花」にて」と前書がある。「仰山」も「みや
はる」もどちらも普段、普通に使われている言葉である。
猫好きな久保田先生のこと、猫にも敬意が含まれていて、
いかにも京都らしい雰囲気醸し出している。

東京下町から京都祇園界限へと場所は移っても、句の
捉えどころはぶれていない。耳にした一瞬の言葉が即、
句にまとまっている。芝居的一幕を見る思いである。

武田巨子

燈下集



○ 園部 落郷

まつ白に吹雪遅れの電車着く
吹雪く駅逃ぐるが如く電車発つ
こだはりの比内鶏入れきりたんぼ
父祖の地は捨てたし降りし雪一丈
醜沸く音ふつふつと余寒かな

○ 松橋 利雄

大寒や一刀彫の干支の竜
二十階下の夜景や鯰大根
みづうみを渡りて来たる鎌鼬
雪吊や秩父訛の「そうだいね」
料峭や杖をたのみの万歩計

○ 小島 禾汀

年豆へひとつ加ふる齡の数
初午や左右の染幡均す風
五指をもて富士湧水の野菜採る
羽化登仙の鞆を数へ待つ
竜天に登る歳時記頁繰る

○ 柴崎 富子

みちのくや片雲つなぐ春の鳶
古城下の遊里の跡や落椿
天指して威を競ひをり牡丹の芽
手廂や七島に春まぎれなし
鷹化して鳩てふ未来うたがはず

○ 橘 正義

筋書のこんがらがって初芝居
フェルメール展にゴヤ展寒多忙
国芳展見てをれば春遠からじ
雪晴の大夕焼となりにけり
オムレツやたつぷり青き葱入れて

○ 小林のり人

天心に月雪道を戻りけり
何もかもひとり駅長雪掻きす
豚の子の尾のひとひねり軒水柱
立読みに店主はたきや春隣
畳敷き椅子にかはるや涅槃寺

○ 三上程子

ものわかりよすぎし人の余寒かな
薄水や思ひ出す人みな遠く
てのひらにささめき零すさくら貝
春風を乗せて各駅停車かな
とれさうな釦を押さへ青き踏み

○ 井上春子

春近し道にはみ出す花屋の荷
鬼やらひ終はり夜風の湿り帯ぶ
まんさくに夕翳しのび寄りにけり
橋渡る靴音固き余寒かな
春の雪父の遺影の笑みさみし

○ 中野あぐり

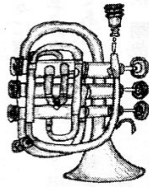
声上げて呼ぶ母あらず初音かな
春宵や銀座老舗で買ふ小筆
豆を煮る烝細めし春の雪
夕空に雲の張りつく西行忌
鳥雲に入るやさびしき土踏ます

○ 諸戸せつ子

立雛菊の御紋を眩しめり(雛五句)
娘のために贅を尽くししお雛様(安田家)
享保雛面長にして華美ならず
和菓子屋と深き縁の雛祭(虎屋)
老いぬれば雛への想ひ募りけり

当月集

安立 公彦選



○ 藤原若菜

春きざす鐘楼門の白き壁

ふたつみつ紅梅ひらく日和かな

芽起しや布袋の腹の黒光り

走り根を踏む杣道や実朝忌

春めくと古都に小さき蜂蜜屋

○ 齋藤晴夫

初釜の風韻を聴く卒寿かな

笹子鳴く白鳳縁起の鎮守様

老・瘦・疎や山門脇の梅開く

女坂紅梅のはや日溜りに

借景や枯山水の梅ほつぽつ

○ 川崎真樹子

せつかちに溶くる都会の春の雪

拾はれぬ十円玉や春の泥

春雷やベートーベンのデスマスク

三月やもやし炒めの歯切れ良し

春の雷身幅はみ出す欲諫む

○ 小山繁子

如月の風を身纏ふひとり旅

春の海男波女波のけふ女波

日恵みの双体仏や芽木の風

児をあやす己の性や雛の菓子

菜の花やローカル線の無人駅

○ 篠原幸子

鳥声の鋭き聖堂や楷芽吹く

木の芽風遊び心のあふれ出づ

白玉椿五感のほかを高めけり

肩ぽんと叩かれてゐてあたたかし

目交にかかるほほえみ古雛

春燈の句

安立 公彦選

聖橋水より昏れて春の月

神奈川 石田 康明

跳越すも踏入るもよし春の泥

妻留守の昼酒少し春炬燵
春風のなづるケープや宮参り

春睡の終点までの果報かな

心はれて梅咲く朝となりしかな

父と子の諍ひ許せ春の鳶

梅咲くや筆の運びもたをやかに

筆塚の文字ふかぶかと花菜風

千葉 神田 恵琳

坐して見る星の蒼さよ冴返る

梅三分心の塵を払ひけり

春愁や琥珀色濃き薬用酒

ゆく春の遺愛の地酒供へけり

夕朧机上に平家物語

六本の点滴きらり冴返る

背伸びして結ぶ神籤や梅三分

神奈川 浅木 ノエ

春しぐれ傘のひとつは閉ぢにけり

春愁や白の空間なすすべなし

春風や弁当の飯かた寄りて

デパートのどんがり屋根や春の雲

春シヨール持たせて結ぶ恋みくじ

草の芽を踏むまじと躲し歩みけり

雪しまく千曲の瀬音昂れり

長野 木内 博一

軒に吊る信玄賞でし寒豆腐

漱石庵に猫の道ある余寒かな

奥多摩の風の育む梅一輪



千葉 大湊 栄子

広島 川崎 雅子

東京 湯上 稔子

余言

安立公彦

親しい友人なのだろう。土産に「柿落葉」を手を訪れたと言う。太ぶりの柿の落葉は、地にあってもその彩りや形はしばらくの間保たれる。虫喰いの小さな穴にも風情がある。わけても鮮やかな色彩は例えようもなく美しい。

この友人はやはり句の友なのだ。

海ばかり見てゐる蟹の家の雛

松本 峰春

まんさくの咲けば便りの待たれけり

佐藤 信子

一読こころ暖まる句だ。「便り」がその思いをあたたく包んでゐる。現在私たちの生活から本来の意味の「便り」が急速に失われて来つつある。携帯電話や電子メール、またファクシミリが交信の手段となつて久しい。もとより交信は時代とともに変わるのちが、しかし「便り」までパソコンというのは、見ていて寒々しいばかりだ。

この句、春に先駆けて咲く金縷梅と、便りを待つ思いがみごとに調和している。この「便り」は北国からのものにとりたい。「まんさく」の表記が一句にとけ込んでゐる。

柿落葉土産にもちて来たりけり

萩原 すみ

「播州室津」の前書がある。この「海」は播磨灘。十キロ沖に家島諸島を望む。「蟹」は漁夫。

南面した障子を開けると縁側の先に一面に輝く室津の海が見える。海に向けて飾られている雛壇。それは住む人にとつては古くからの慣わしだろうが、旅人の目には「雛」が「海ばかり見てゐる」と見えて来る。さらにそこには「定め」という思いも湧く。しかしこの句はそういう重いテーマではなく、蟹の家の的確な写生句として鑑賞したい。

杉街道われも余寒の旅人や

鈴木 直充

この「杉街道」は日光街道か。手許に『古街道を探検する』という本がある。それによると各地の推奨する古道は百を越す。中には「琵琶湖湖上の道」という古道もある。

日光街道と言えば私たちにとっては忘れることの出来ない

『おくのほそ道』行脚の地である。芭蕉は今市からこの日光街道に入っている。日光の杉並木が植えられたのは、寛永二年（一六二五）からとある。芭蕉がこの地を通ったのは元禄二年（一六八九）、杉並木はすでに六十四年の歳月を経ている。杉街道としてはまさに壮年期の姿を芭蕉と曾良に見せたことであろう。

作者はこの杉街道を通りながら、『おくのほそ道』に思いを馳せる。今は三百八十余年の樹齢となり、天を突くばかりの杉並木は、それを仰ぐ作者に「旅人」の思いを示唆する。その思いを作者は下五の「や」にこめるのだった。それはまこと一句を「不易」の句と成している。

いまさらに母との月日紙雛

近藤 牧男

作者の母堂が不帰の人となったのは一昨年未だだった。近刊の牧男句集『六月』の序文にも書いたが、作者は二歳の時二十四歳の母堂に抱かれ、モンゴルから引揚げた。内地の歳月には苦難は多かつただろう。しかしそれはまた同時代の人皆が負うて来たことでもあった。その苦しみは時に愉しさを伴う。そうして戦後の復興は成し得られた。

三月三日、作者は母存命の頃、然り気なく母が飾っていた「紙雛」を取り出して机上に飾る。子息にとつて母の存在は何ものにも替え難い。「いまさらに」がその思いをみごとに言い止めている。

身の内の鬼やらふべき手術かな

小菅 礼子

作者は大腸の手術後肺炎を併発し長く病床にあつた。この句、その手術を受ける際の感懐である。折しも節分、病根は身の内に寄生する「鬼」だ。「手術」はその鬼を祓うべき神意の手段である。直截な表現の中に作者の緊張した姿が浮かんで来る。この句、現代の医療を追儻と言う伝統行事に絡めて良く一句と為している。

乳母車映して水の温みけり

小泉 三枝

「乳母車」ほど見る者に安らぎと希望を与えてくれるものはない。それは乳母車を押す若い母親にとつては尚更のことである。その乳母車が池の辺に止まっている。折しも仲春三月、乳母車を映す池の水も温む頃だ。

この句、「映して」、「水の温みけり」と、乳母車に意志があるかの如く表現しているところが絶妙だ。

菜の花や朝のしじまの薩摩富士

菅澤 陽子

「薩摩富士」は開聞岳。標高九二四米の山ながら、日本百名山に選ばれている。この山の良さは円錐形の容姿と、海上に山裾を巡らす立地条件のみごとさだ。

作者は一面の菜の花畠に立ち、開聞岳を眺める。「朝のしじま」だけの表現が却つてこの山の端正な姿を言い留めている。開聞岳は信仰の山。九州の南端にあるため訪れる人は少ないが、秀麗な山容は忘れ難い。